



Title	建築計画における空間処理に関する基礎的研究
Author(s)	紙野, 桂人
Citation	大阪大学, 1974, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31235
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・(本籍)	紙 野 桂 人
学 位 の 種 類	工 学 博 士
学 位 記 番 号	第 3 2 2 2 号
学位授与の日付	昭 和 49 年 11 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	建築計画における空間処理に関する 基礎的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 足 立 孝 (副査) 教 授 岡 田 光 正 教 授 伊 藤 克 三 教 授 五 十 嵐 定 義

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、建築計画における空間処理の計画原理を基礎づけるために、人間の建築空間把握の実態を明らかにしようとし、認識内容を客観化するための手法として考案された認識地図法により各種の調査を行い、その結果から空間把握の基礎構造を明らかにしている。

本論文は、4章からなる。

第1章では、建築計画学の視点から建築空間概念の展開を紹介し、特に本論がとる環境論的観点による空間概念を示すとともに、本論の位置づけならびに方法論を述べている。

第2章では、小学校各学年児童を標本として行った調査ならびに家族成員内の年令差のある一組を標本とした調査から、児童における空間の身体行動的把握と概念的体制的把握の類型を明確化し、前者が低学年児童に、後者が高学年児童に著しいこと、ならびに一連の発達過程として連続していることを示している。

第3章では、児童における傾向が一般化しうるかどうかを検討するために、成人を対象とし、さらに、認識の対象となる空間が拡大するにつれて認識傾向もまた変化することを予想し、駅コンコース・地下街・市街地界隈・都市圏域の4段階についてそれぞれ調査を行っている。一般的に成人は概念的体制的把握傾向が強いとみなされるが、駅コンコースでは一義的な概念的体制的把握は認められず、身体行動的把握の優勢が認められた。

地下街では、場所的展開に関して身体行動的把握の連鎖が認められ、その全体的枠づけについては、直交軸による秩序化傾向の強いことが明らかにされた。

市街地界隈でも、直交軸による秩序化傾向が認められ、特に街路交叉部や駅広場のような場所の再

認が顕著であり、界隈の領域を境界づける性格があることを立証している。このような知覚的特徴から知覚的把握なる類型を加えることを提案している。

都市圏域では、主として交通路線の機能図式による概念的把握傾向の優勢を示している。

第4章は結論であり、諸類型が空間処理の基礎条件として活用しうるものであり、それぞれが異った空間の組織化にはたらく一連の重層的関係にあることを明らかにし、さらに空間処理に関する諸問題への適用についても言及している。

論文の審査結果の要旨

本論文は、人間の建築空間把握の基礎的構造に関する研究成果をまとめたものである。

著者はまず、児童の建築空間把握の類型を論じ、一連の発達過程にそれぞれが位置することを明らかにしている。

ついで、成人にも同様の類型が適用されることを検討し、また、空間の拡大とともに把握傾向も変化すること、さらに、地下と地上での把握のズレについても明らかにし、これらの諸調査の結果から新しい類型を提案し、それぞれが重層的関係にあることを示している。

さらにまた、以上の結果が空間処理の諸問題に有効であることをも確かめている。

以上のように、本論文は、新しい研究分野であるところの空間把握に関して重要な研究成果を挙げているものであり、建築計画分野の進歩に貢献するところが大きく、博士論文として価値あるものと認める。